

水に沈む父と息子

—テオドア・シュトルムの小説における水死のモチ - フー

竹治 進

(1) はじめに

私たちが文学作品の中で多くの死者に出会うのは当然と言えばあまりにも当然であると言えよう。それも通常ありきたりの大往生というのはまれであって、たいていが事故死や自殺や、夭折といった望ましくない死が多数を占めることは、文学というものの性質上、これまた当然と言えば当然と言えるであろう。そうした死者のうち、ドイツ文学においては水に落ちて死ぬ者の占める割合の大きさが目に付くのである。文学におけるもっとも印象深い水死者ということになれば『ハムレット』のオフェ - リアに第一の席を譲らざるを得ないが、数のうえならドイツ文学も負けてはいない。ゲ - テ『親和力』の幼児オットー、メ - リケ『画家ノルテン』の主人公ノルテンの許嫁アグネス、ケラ - 『村のロメオとユ - リア』の主人公である少年と少女、T.マン『小さなフリ - デマン氏』の同名の主人公、フライタ - ク『借り方と貸し方』の主人公アントンのライバルでユダヤ人のファイテル・イツィヒ、ヘッセ『車輪の下』のハンス・ギ - ベンラ - トなどがすぐさま思い浮かぶ。小説以外では、シュ - ベルトが曲をつけて有名になったW.ミュラ - 『美しい水車屋の娘』の若者がおなじみではなからうか。

そうしたなかでもとりわけ水死者を好んだドイツの作家がテオドア・シュトルムである。彼の作品における水死者の多さは偏執と呼んでよいほどである。『大学時代』の主人公ロ - レ、『莊園にて』の主人公アンネ、『ヨ - ン・リ - ヴ』のリック・ガイア - スとその娘アンナ、あるいは『管財人カルステン』における主人公の息子ハインリヒがそうである。『キル

ヒ父子』の息子ハインツも家を立ち去ったあと父親ハンスの幻覚に水死者となって現れ、その後二度と姿を見せることはないで、やはりこの仲間とみなしてよいであろう。さらには『水に沈みぬ』の幼児ヨハンネスが池で溺死し、『白馬の騎手』では主人公一家が洪水に吞まれる。

水死のモチーフを論じることなしにシュトルムの文学を論じすることは不可能であるとさえ言って過言ではないと思われる。ところが、これまで私の知る限りでは、一般的にシュトルムの創作における水死者の多さを指摘したり¹⁾、個別作品における「水」の意味を論じたり²⁾することはなされても、いくつかの作品を分析的に比較して、それらに共通している、あるいは相違している「水」ないし「水死」の意味を探ろうという論考はないようである。そこで本稿では、シュトルムの小説において水死のモチ - フがどのように扱われているかを、複数の作品によって探してみたいと考える。

そのために取り上げた小説は6篇である。すなわち上に名を挙げた水死者の出る作品のうち『ヨ - ン・リ - ヴ』『管財人カルステン』『キルヒ父子』『水に沈みぬ』の4篇と、水からの生還者が登場する『画家の仕事』『桶屋のバッシュ』の2篇の小説がそれである。後者2篇を考察の対象に加えるのは、水からの生還という対照的なモチ - フとの対比によって水死のモチ - フの意味がより鮮明に浮かび上がって来ると考えられるからである。

以下では、まず各作品の梗概を記述したうえで、その作品の中で水死者（生還者）がどのような脈絡において現れ、水死（生還）のモチ - フがどのような意味を担っているのかを論じてみたい。

（２）各作品の梗概と分析³⁾

『ヨ - ン・リ - ヴ』

樺物語の構成を取る。樺の語り手の住む田舎へ、元船長で今は引退したヨ - ン・リ - ヴが引き移ってくる。彼はかつての友人であるリック・ガイ

ア・スの孫にあたる男の子を育てている。この男の子は祖父の名を引き継いでリックという名である。語り手はかつてハンプルクのギムナジウムの生徒だった頃、ヨ・ンと同じ家に下宿していたことがあり、ヨ・ンとは顔見知りである。18年ぶりに再会した語り手の好奇心に応じるままにヨ・ンは、少年リックを引き取り、遺産相続人とするに至ったいきさつを語る。それが内部物語にあたる。

祖父のリック・ガイア・スは若い頃は身持ちのよい元気な男で、腕のいい船乗りであり、ヨ・ンよりも先に船長になった男であるが、結婚後は酒に溺れ、酒に酔って修理中の橋から運河に転落して死んでしまった。未亡人と娘アンナとが二人きりで残された家にヨ・ンは下宿人となり、アンナをわが子のようにかわいがる。彼女が母とともに小さな服飾雑貨の店を開けるように自分の財産の大半をつぎこんで資金援助もしてやる。ところが、ヨ・ンが船長として何年か留守にし、帰ってきてみると、アンナはある男爵と懇ろになり、町の市民連中からは白い目で見られるような生活に落ち込んでいる。ヨ・ンの心配も心づかいも結局功を奏さず、アンナは男爵の子を身籠もり、捨てられる。男の子を生んだ後、彼女は父が溺死したのと同じ場所で河に身を投げる。

ヨ・ンはアンナの母親と息子を引き取り、叔父から受け継いだ田舎の土地へ彼らを連れて移る。その土地でかつての同宿人、ギムナジウムの生徒であった梓の語り手に偶然再会し、事の次第を語るわけである。その物語が終わってから梓の中ではそれから10年が経過し、いたずら小僧だったリックは船乗りになり、ついには船長になったという報告が届いたところで小説は終わる。

この小説の鍵であるヨ・ンとアンナの関係を考えてみよう。アンナは子供を生んだ後も絶望から立ち直る気配を見せず、死んだ父のことをさかんに口にしては、死へと傾斜する気持ちを彼女なりのやり方でヨ・ン

に告げる。そんな彼女にヨ - ンは赤ん坊を自分の子供ということにしてやろうと申し出る。アンナもさすがにこれは断るが、しかし、アンナと彼女の子供を遺産相続人にするという申し出は受け入れる。そうしたうえで次の夜明けに入水する。

ヨ - ンがそこまでアンナの面倒を見ようとした理由として、アンナの破滅の責任が自分にあるという自責の念に捕えられたからだという説明がなされる。というのも、男爵に誘惑された夜、彼女は酔い潰れていたということであり、それ以前、まだ少女であった彼女に酒の味を覚えさせ、父親リックから受け継いだ飲酒の遺伝体質を目覚めさせたのは自分だからとヨ - ンは考えたからである。確かに彼は自分が酒をたしなむ際に給仕役のアンナに毒見役をもさせるというまずい冗談を好んだのはあるが、しかし、それがアンナの破滅の原因であるかと問えば、そうだとは言えない。ヨ - ンの思い込みとは裏腹に、毒味役から飲酒癖、飲酒癖から誘惑への屈伏という因果関係は物語のどこにも、かつ一般的にも存在しないからである。にもかかわらずヨ - ンが自分の責任に執着するのはなぜなのか。

そもそも飲酒癖そのものも実際はどうであったのかさえ不明である。しかし、もしアンナが飲酒癖に捕われていたと仮定するなら、それはリックから遺伝によって与えられ、ヨ - ンによって助長されたものであり、二人の合作であるということにならざるを得ない。この物語には生みの親リックと育ての親ヨ - ンという二人の父親が存在すると言ってよいが、アンナが飲酒癖によって破滅したとするならば、それは彼女自らの責任ではない。遺伝のせい、言い換えれば二人の父親の罪なのである。それがヨ - ンの論理である。彼は心のうちで「おまえのせいだ、おまえのせいだ」と責める声を聞く。しかし、これはほかならぬ彼自身の声であり、彼は自分で自分を責めているのである。なぜなら、そのように思い込むことで彼はアンナの父親になれるからである。娘の淪落を救えなかった

父親の罪。その父親の罪を生みの父親と折半し、娘を罪から救い出すための論理が飲酒癖犯人説なのであった。しかし、父親になれそうになった途端に娘は死ぬ。彼女は生みの父親のところへ行ってしまった。ヨンを、父親になりそこねた父親と呼んでも差し支えないであろう。そんな彼がアンナの父親になれるのは、彼女の子供リックのおじいちゃんになるという迂回した道を経てのことである。

『キルヒ父子』

バルト海沿岸の小さな港町の船乗りハンス・ア・ダム・キルヒは人一倍の勤勉と倹約とによって水夫から船長、そして船主へとたたき上げてきた男である。彼の野心はしかしそれで満足せず、市参事会員になることを夢見ている。たとえ彼自身には無理であるにしても息子のハインツにはそこまでの出世を期待している。自分の立身出世のプランを引き継ぎ完成してくれる者としてハンスは息子を愛している。彼がハインツの12才年下の妹リネにはまったく関心を示さないのも女の子は後継ぎでないからである。しかし、ハインツが評判の良くない洗濯女を母親に持つ少女ヴィー・プと親しくなったことは父親の期待に影を落とし始める。見習い水夫としての経験を積んで17才になったハインツは1年以上かかる航海へと出かけることになる。出発の前夜、別れを惜しむためにヴィー・プをボートに乗せて海上へと漕ぎ出した彼は10時の門限に遅れ、父親から厳しく叱責される。この町には夜の10時に時を告げて門限を知らせる「市民の鐘」というものがあり、ハンスにとって息子がこの鐘に体现されている市民の守るべき掟を破ったことは許し難いことなのである。そのうえ彼は後日、息子が門限を破った理由がヴィー・プと一緒にいたためだと妹ユレ（ハインツにとっては叔母）から聞かされ、ひどいショックを受ける。ユレは追い討ちをかけるように、ハインツとヴィー・プがいずれ結婚するのだらうとほのめかしては兄の困惑を意地悪く楽しむ。ハンスは息子へ手紙を書いて、突発的な怒りを溢れ出させる。

これ以後、物語はしかし案に相違して、ハインツとヴィー・ブの恋が父親ハンスと衝突して悲劇が生まれるという展開を取らない。長期に渡ってハインツの不在が続くのである。結局はハインツの帰郷までに20年近くの才月が経過してしまう。彼が帰ってきたとき母親はすでに亡くなり、妹のリナは隣の裕福な市民の息子と結婚し、ヴィー・ブさえも結婚してしまっている。彼女は亭主のやっている水夫相手のあやしげな酒場で働いているのである。

少年の頃のはつらつとした面影もなく、うらぶれて荒んだ雰囲気漂わせた水夫くずれの中年男をどう取り扱うべきなのか分からず、みんなは困惑するばかりである。参事会員への出世などもはや論外である。そんなとき、町に広まったある噂が態度を決めかねているハンスに息子と縁を切る決意をさせることになる。噂によれば、町の貧民施設にかつてハインツと年格好のそっくりなハッセルフリッツェという少年がいたが、これがハインツと同じ頃に船乗りになり町を離れた。その男が財産目当てに今ハインツになりすましているのだという。

ハインツは、ハンスが差し出した手切れ金の大半をその場に残して姿を消す。それから1年ほど経ったある嵐の夜、ハンスは幻覚に全身ずぶ濡れのハインツを見る。ハンスの信じるところでは、船乗りはそんなふうにして自分の死を知らせるのである。その夜ハンスは卒中の発作に襲われるが、生き延びる。不自由な体ではあるが歩けるようになった彼は、海辺に散歩に出れば彼方の海原を望むことを日課とする。その彼に付き添うのは、自堕落な亭主と死に別れたヴィー・ブである。数年後ハンスも帰らぬ人となる。彼が始めた事業は娘婿の手によって拡大され、この娘婿が参事会員になる日も遠くないと思われる。「しかし、ハインツ・キルヒはどこに消えたのだろう」というのが小説の結びである。

この小説には聖書中の話が多く借用されモチ・フとして利用されている。ハンスはフルネームをハンス・アダム・キルヒといい、人類の始

祖と同じ名前をもつ。アダムに対して閉ざされた楽園の扉は彼にも閉ざされてしまう。マドンナのような顔と形容されるヴィー・ブは最後にマドンナさながらの慈しみぶかい存在となる。子供の頃ハインツはヴィー・ブに牧師の家のリンゴを取ってやるが、彼もまた楽園を追放されることになる⁴⁾。長い不在の後のハインツの帰郷は「ルカ福音書」15章で語られる放蕩息子の帰郷を想起させる⁵⁾。

しかし、なんといっても物語の展開にとって重要なのはイスカリオテのユダがイエス・キリストを裏切った話の借用である。航海へ出してから2年してようやくハインツから手紙が届く。それまでに音沙汰のないハインツをハンスはすでに「あいつはわしに楯突こうというつもりなんだ」と考えている。そこへ届いた息子からの手紙には切手が貼られていない。ハンスは30シリングの不足料金を支払うことを拒み、手紙は送り返される。将来、参事会員になるべき人間が切手代さえもっていないなどというのはハンスにとって許しがたいことなのである。この行為が銀貨30枚でイエス・キリストを売ったユダの背徳行為のパロディであることは⁶⁾、小説の中でもユ・レによってこれまた皮肉まじりに言及されているとおりである。そしてこの手紙の受け取り拒否が意味するところは、期待にこたえようとしない息子の拒否なのである。それゆえ20年近く後にハインツが帰ってきたときには、人間そのものを拒否することへとつながって行く。

帰郷したハインツが偽者であるという噂にハンスはすぐ飛びつくわけではない。まずリ・ナが、兄でないかもしれない男が同じ屋根の下にいることに不安を募らせる。さらに、ハインツが一晩家を空けたことで家人の不信感がかきたてられる。父親からも胡散くさそうに見られているのに気づいたハインツがかつての手紙の一件を持ち出して父親をなじる。この一件は本人にしか分からないはずのことである。しかし、そんなことはユ・レに言わせれば乞食の子供に3ペニヒ握らせたなら聞き出せるこ

となのであり、彼女はハインツが偽者であることに固執する。彼女はさらに、ハインツが少年のころに腕に焼きつけた錨の入墨がハインツを名乗る男の腕にはないことを偽者の証拠として挙げ、町の医者も、ハインツがやったような火薬で焼いた入墨は天然痘にでもならない限り20年経っても消えないと証言する。これで大勢は決する。ハインツが偽者であると決めつけても許されるであろう。ハンスは手切れ金をハインツに差し出し、ハインツはその大半を残したまま翌朝早く家を出る。

ハインツが立ち去った直後、駆けつけてきたヴィー・プは彼を呼び戻すようハンスに懇願する。その際、彼女はハインツが航海に出るときに形見にくれた指輪を見せ、これをあの人がもっていたのだと説得するが、ハンスは聞く耳をもたない。「わしの家の屋根の下で寝ていたあの男ならどんな名前であれ好きなように名乗ればいい。私のハインツは17年前に私からいなくなったのだ」というわけである。また、その後しばらくしてハンスは、かつて貧民施設で働いていた男からハッセルフリッツェも同じような入墨をしていたと知らされる。つまり、入墨のないことは偽者の証拠ではないことが明らかになる。しかし、これを聞いてもハンスは一瞬衝撃を受けるだけで、あとは感情を押し殺してしまう。帰郷した放蕩息子を牛をほふって迎えた「ルカ福音書」の父親とは対照的に、ドイツの北の海辺の父親はついに息子を迎え入れることはなかった。『キルヒ父子』は、息子を拒否し続けた父親の物語である。

『管財人カルステン』

衣類の商いで生計を立てているカルステン・カルステンスは、商売のかたわら、寡婦や未婚女性が法律上管財人を必要とする場合にその役を引き受け、ついには本業以上の身の入れ方で、町の連中からは「管財人カルステン」という仇名をもらう。彼が犯した唯一の失敗は、ある自殺した投機師が後に遺した娘ユリア・ネの管財人になったとき、その若さと美しさに参ってしまい

結婚したことである。四十男が若くて奔放な美人を女房にした場合に起こるはずの悲喜劇はしかし、ユリア - ネが最初のお産で男の子を生むとさっさと死んでしまうことによってたちまち幕を下ろす。妊娠中くり返し「もう一度ダンスができさえすれば」と言っていた彼女の望みは叶えられることなく終わってしまい、カルステンは危険を免れはしたが、同時に幸せもなくしてしまう。

ところが実は危険は去っていなかった。ユリア - ネが遺した息子ハインリヒは絵に描いたような道楽息子となり、父親を苦しめる。見習いとして勤めている商店の仕事で集金してきた金を博打でなくしてしまう。故郷の町にいらなくなり、父親のつてでハンブルクで働くが、投機的な商売に手を染め、失敗し、父親に尻拭いをさせる。

カルステンにはもうひとり子供がいる。遠い親戚の娘アンナが8才で孤児になったときから引き取って面倒を見、併せてその遺産の管理も引き受けている。彼女はハインリヒより1才年下で、二人は兄妹のように育つ。彼女は犠牲精神の権化であって、ハインリヒを救うために財産のみならず自分自身を差し出すことも厭わない。町の小間物店が売りに出されたとき、彼女はハインリヒの求婚を受け入れる。それによってカルステンの工面できる資金だけでは買い取れなかった店も手に入り、ハインリヒは故郷に戻って商売を始めることができる。最初のうちこそ商売も家庭も順調に行き、子供も生まれる。しかし小商いに満足できないハインリヒは家畜の輸出や牡蠣の養殖に手を出し、家にいるよりも外で過ごすことが多くなり、借金を背負い込む。カルステンはその都度土地を手放して穴埋めをしてやる。

夜遅くまで酒場に入り浸って怪しげな金儲けの話と賭け事にうつつを抜かしているハインリヒにも最後の時が訪れる。大きな洪水が町を襲ったある夜、彼は父の家を訪れ、父が管理しているアンナの資産の残りを引き渡して自分を破産から救ってくれるように請うが拒否される。自宅へ引き返そうと乗っていたボートが転覆し、しばらくの間水中から突き出た杭に掴まって救助を

待つが、ついには水中に没して二度と姿を現すことはなかった。あとには父親と妻と幼子が残される。「我主である神よ、私は子供のために苦しみましょう。ただ、あの子を失わせないでください」と、かつてカルステンが唱えた祈りは前半分が聞き入れられ、後半分は拒絶されたのである。

カルステンの不幸はユリア - ネとの結婚に由来するのだろうか。彼女は早々に舞台から姿を消しはするが、その息子がきちんと彼女の血を受け継ぎ、十二分の働きをする。母の血が息子に伝わって父を苦しめるというのは必ずしも論理的ではないが、物語のうえではやはりユリア - ネとの結婚が不幸の原点であると考えるのが妥当であろう。それに関して興味深いのは、ユリア - ネが投機師の遺した唯一の借り方在高に譬えられている点である。彼女は、大勢が検査にやって来るが買い手のつかない借り方在高だと言われる。であるとすれば、そんなものを引き受けたカルstenは管財人失格ということになる。彼の失敗はまず管財人としての失敗であった。

ユリア - ネは借り方在高に譬えられるだけではない。ロ - レライにも譬えられている。カルstenが一人遺されたユリア - ネのところへやって来たときの彼女の様子は尋常ではない。父親の棺桶のそばで彼女は低い椅子に両膝を体に引き寄せて座り、金髪をくしけずっている。しかも半分服を身に付けて、つまり半裸体でというのである。どう見ても初対面の管財人を迎える態度ではない。しかし、これがロ - レライの姿であると分かれば納得もできよう⁷⁾。ライン河の難所で通りかかる船の舟人を誘惑しては難破させたロ - レライがここではカルstenを誘惑し、難破させようと待ち構えているのである。ユリア - ネの流れ落ちる金髪が別の機会にもカルstenを魅了したことは彼自身の追憶のなかでもう一度触れられている。名ざしこそされていないけれどもユリア - ネがロ - レライであることは十分に示されている。不良資産であるロ - レライに誘

惑されたカルステンは人生に難破することになる。管財人としても父親としても難破するのである。

最後にハインリヒが水中に没する場面は、カルステンの父親としての無力を象徴的に表わしている。水から突き出た杭に掴まったハインリヒは父の名を呼びながら姿を消す。これは十字架に架かりながら父たる神に呼びかけたイエス・キリストのパロディである⁸⁾。キリストには蘇りが与えられたが、ハインリヒにはもちろん与えられない。

ハインリヒはしかし、最後になってようやく溺死するのではない。肉体が減じる前に精神的に破滅しており、その意味ではずっと以前から人生の難破者である。彼の生が生命に敵対的な存在としての水と近い関係にあるということが2つのエピソードによって浮き彫りにされるのもそれゆえである。第1に、最初の大きな躓きとなった、集金した金を賭博ですってしまった事件のさい、こっそり帰宅した彼は井戸の縁に中向きに腰を掛け今にも落ちそうな姿勢でいるところをアンナに見つけられる。アンナが後ろから抱き止めたおかげで彼は井戸に落ちずにすんだし、身投げするつもりなぞなかったと後になって語るが、真意は不明のままである。彼の真意はどうであれ、彼が危険な水あるいは死のすぐそばにいたということ自体は事実である。第2に、ハインリヒが少年の頃、カルステンは彼を連れて離れ島へ海鳥の卵を捜しに行ったことがある。そこで彼らが見つけたものは卵ではなく、打ち上げられた溺死体であった。

他方、水は罪を洗い清めてくれる存在でもあり、キリスト教世界においては洗礼の水がそういうものとして認知されている。この点で興味深いエピソードがひとつ語られる。カルステンの姉で同居人のブリギッテは自分たちの弟にあたるペータが5才で死んだことを今なお嘆くのであるが、ハインリヒの使い込み賭博事件のあと弟に向かって、もしペータが生きていたら私たちの牧師になってハインリヒを洗礼してくれたのという突飛なことを口にする。しかし、これは次のように理解すれ

ば突飛ではなくなるであろう。すなわち、カルステンにもブリギッテにもどうしたらハインリヒを罪から立ち直させたらよいのか分らない。頭の良い（とブリギッテの考える）ペ - タ - が生きていたらハインリヒの罪を清めてくれたであろう、すなわち立ち直らせる術を心得ていたであろうに、という意味である。

ところが、洗礼してくれる叔父をもたないハインリヒはついに罪から清められることのないまま溺れ死ぬ。そして、カルステンもまた人生に難破する。この小説は水に沈んだ父と息子の物語なのである。

『水に沈みぬ』

タイトルからしてこの小説は水死のモチ - フを偏愛したシュトルムの作品の中でも特別の存在である。特別の存在であるのはタイトルだけではなく、内容もそうである。シュトルム水死小説の極点と呼びたいくらいである。作者自身この作品には自信を持っていたということであるし、同時代の作家や批評家たちの評価も高かった⁹⁾。『インメンゼ - 』と並ぶ代表作と見なしてよいであろう。少し詳しく見てみたい。

杵物語の形式を取る。杵の語り手が偶然見つけた画家ヨハannesの手記が内部の物語を構成する。舞台は17世紀のホルシュタイン。ヨハannesは庶民の子であるが、亡き父の友人であり父とも慕う貴族ゲアハルドゥスの援助の下に5年に渡る画家としての修業を終え、アムステルダムから帰郷してきたところから物語は始まる。恩人ゲアハルドゥスはちょうど亡くなったばかりで、跡継ぎのヴルフは学問芸術を愛好した父とは反対に狩りと酒と放埒を好む野蛮な男であり、画家ヨハannesとは相容れない存在である。ヨハannesとヴルフの妹カタリ - ナとは幼なじみでもあり互いに好意を抱いているが、身分の違いゆえに彼らの恋が成就する可能性はない。

尼僧の叔母を頼ってカタリ - ナは修道院へ入る決心をする。ヨハannesが

彼女の手紙を秘密裏に叔母の元へ届け、返書を携えて戻ってくると、村の居酒屋でヴルフとその仲間の貴族クルト・フォン・デア・リッシュに出くわす。リッシュの馬丁が修道院のある町で彼を目撃していたために、ヨハannesがカタリ・ナの使者を勤めたことがヴルフの知るところとなる。ヴルフがけしかけた猛犬の顎門をのがれてヨハannesは森を抜け、ゲアハルドゥスの館の庭へ逃げ込む。それでも犬たちが彼を追いつめ万事窮すかと思われたその時、頭上からカタリ・ナの呼ぶ声がし、ヨハannesは鳶に掴まって塔を上へとよじのぼり、カタリ・ナの寝室へと難を逃れる。

その夜ふたりは結ばれ、夜明けとともにヨハannesは館を抜ける。しかし、犬に食いちぎられたマントの切れ端が塔の下に落ちていたことから彼がカタリ・ナの寝室にいたことがヴルフに知られる。館に赴いてカタリ・ナとの結婚を申し出たヨハannesにヴルフが与えた返答は拳銃の弾丸であった。傷ついたヨハannesは何週間かの静養ののちアムステルダムへ赴き、残しておいた絵を売ったり、新たな注文に応じて絵を描いたりして金を得、次の年の春にカタリ・ナを迎えに戻る。しかし彼女は館から姿を消しており、行方は誰も知らない。

ヨハannesの手記は2部から成り、以上がその第1部である。手記第2部において物語の舞台は5年後の北海沿岸のある町へと移っている。ここへは町の書記を勤める兄が住んでいたり、また、金持ちの未亡人が亡夫の供養のため教会へ寄進する絵を彼に注文したりという事情で移り住んだのである。ところが、この町から少し離れたところにある村の教区が現在の牧師の肖像画を教会に寄進するためヨハannesに仕事を依頼する。この牧師こそカタリーナの夫であり、この偶然がヨハannesとカタリーナの再会へ、そして息子の溺死へとつながっていく。

牧師は元はブランデンブルク軍の従軍牧師であったのが、父親のいない子供とその母親を自分の妻子として引き受けることを交換条件にして教区付きの牧師職を手に入れたらしいのである。ヨハannesは、人前に姿を現さない

牧師の妻がカタリ - ナではないかという疑惑を抱くが、それを確かめる機会がある日やってくる。それは、町で魔女の火あぶりの行なわれる日である。正確には、牢屋で死んでしまった魔女の死体を火にかける日である。生身の人間の火あぶりを見るという楽しみは損なわれはしたが、それでも人々は魔女の死体の火あぶりを見物に出かける。村の学校も休みになり大人も子供も町へ出かける。牧師も役僧も出かけ、その隙を突いてヨハannesは牧師の妻を不意打ちすることに成功する。やはり彼女はカタリ - ナであり、子供はヨハannesの息子であった。最初ヨハannesを拒絶していたカタリ - ナがヨハannesと自らの情熱に屈して彼の抱擁を受け入れたとき、母親の目を離れた子供は池で溺死する。牧師の願いによってヨハannesは亡き子の面影を画布の上に留め、睡蓮の花を描き加えて子供の手に持たせる。そして、その絵の銘としてC.P.A.S. (Culpa Patris Aquis Submersus「父の罪により水に沈みぬ」の頭文字)と書き込み、永遠に村をあとにする。

ここで罪と呼ばれているものがたんにうかつな父親の不注意などでないことは明白であろう¹⁰⁾。なにしろこの父親はイエス・キリストに洗礼を施したヨハネと同じ名前をもっているのである。彼の為すべきは人間の罪を洗い清め、新たな生へと蘇らせることなのである。しかし彼のやったことはその正反対であった。

主人公と洗礼者ヨハネとの結びつきはただ名前のみによって示されているのではない。手記第1部の末尾でペンを置くきっかけとしてヨハannesは、甥が手紙で娘の洗礼に立ち会うよう依頼してきたことを挙げている。ほかならぬ洗礼に立ち会うために彼は一旦筆を置くのである。今ここで「洗礼に立ち会う」と訳したドイツ語は< aus der Taufe heben >であり、名詞< Taufe >は動詞< taufen >に由来する。そして< taufen >は「深い」を意味するゴート語の形容詞< diups >にまでさかのぼる¹¹⁾。したがって< aus der Taufe heben >は文字どおりには「深みから引き上

げる」という意味である。第1部の最後で甥の娘を深みから引き上げる
ことになったヨハネスは、第2部の最後で自分の息子を水に沈ませて
しまう¹²⁾。

さらに興味深いことに、ヨハネスとカタリ - ナの結ばれた夜は聖ヨ
ハネの祝日にあたっている。この設定に重要な意味が与えられているこ
とは、この日、村に帰ってきたヨハネスが夜の闇のなかを歩いている
と、まわりに蛍（Johannisfünkchen）が飛び交うという情景描写が挿入
されていることでも裏書きされている。このようにして、洗礼者ヨハネ
に因む日に出生の源を持ち、ヨハネスという名の父を持つ子はその父
の過失によって水に沈んだままになる。その子の名もまたヨハネスと
いうのである。

さて、息子ヨハネスが溺れるのは牧師館の庭にある池であるが、こ
の池は周囲に柳の生い茂っていることが死を暗示する程度で、それ自体
としてはあまり恐ろしいイメ - ジと結びつけられた存在ではない。にも
かかわらず、子供の溺死が小説全体の中で突発的な印象を与えず、それ
が持ち上がってみればむしろ当然の出来事であったという印象を与える
理由は、タイトルの所為もあるけれど、それに加えて、先祖の呪いとい
うロマン派好みのモチ - フで伏線が張ってあるからである。

カタリ - ナとの一夜にも夜明けが訪れ、彼女の部屋を後にしたヨハン
ネスはいつのまにか館の庭でイグサの生えた沼地に足を踏み入れる。蹀
の上まで泥にはまり、「まるで何かが足を引っ張り込もうとしているかの
よう」であり、ヨハネスは「この家の亡霊がお前を捕まえようとして
いるのだ」と考える。

「この家の亡霊」についてはすでにそれ以前に記述されており、それを
視覚的かつ悲劇先取りに表わしているのがある女の先祖である。彼女は
何代かを遡ったゲアハルドゥスの妻であったが、身分の違う別の男を愛し
ており、一人娘を呪い、娘は庭の池で溺れ死んだというのである。彼女は

先祖代々の肖像画のなかから今もお冷たい目つきでヨハネスとカタリ - ナを見下ろし、その目つきはヴルフの目の中に甦っている。さらに、この一族に不幸が起ころうというときには先祖の誰かが姿を見せると言われており、ヨハネスはそれらしい者の手を目撃する。池はその後埋められたが、その地面からは今でもトクサやイグサが生えている。ヨハネスが足をとられたのはここである。しかし、館の池は埋められたけれども埋められなかったと言うべきであろう。なぜなら別の場所、すなわち教会の庭に口を開けて犠牲者を待ち受けていたのであるから。

さらに言えば、次の点に注目すれば教会の池もたんなる池ではなくなってくる。すなわち、ヨハネス自身が手記の中で < Culpa Patris Aquis Submersus > のドイツ語訳を書き記しているのだが、 < Aquis > に < Fluth > という語を充てている点に注目したい。 < Fluth > は「満潮」「洪水」という意味であって、少なくとも池の水に充てるべき語ではない。そのうえ彼は息子の遺骸に向かって「父親の罪が我々みんなを黒い洪水 (Fluth) の中にひきさらってしまったのだ」と語りかける。ということは、たんに一人の幼児が池にはまって死んだのではなく「我々みんな」が洪水に吞まれたということになる。この「我々みんな」とは誰か。ヨハネスとカタリ - ナを含む親子3人であると解釈するには、「洪水」は大げさすぎよう。

それ以前にヨハネスは教会の役僧から32年前の洪水の話を聞かされている。高台に位置する教会からは西の方に海岸が見渡せるが、かつてはその海岸に役僧の家があり、それが大洪水の際に他の百軒の家ともども水没して、役僧の父と兄 (弟) は死んだというのである。このことを考え合わせれば、「我々みんな」が不特定多数の人間にまで射程距離を延ばしていると理解しても、あながち過剰解釈であるとは言えまい。

さらに池の水は火と対比されることによって原初的なイメージを獲得するとともに、火以上に生命に敵対的な存在として表現されている。ヨ

ハンネスがカタリ - ナと再会し子供が溺死するのは、町で魔女の火あぶりが行なわれる日である。町では火がすでに牢屋で死んでしまった魔女の死体を焼き、村では水が新たな犠牲を要求する¹³⁾。火が死体を焼くだけで、ある意味では救いをもたらすのとは対照的に、水はあくまで死を求めるのである。

最後に、ヨハンネスの手記がどのように終わるのかを見てみよう。死んだ子供とカタリ - ナのいる村を後にして町へと続く野を歩みつつ彼が村のほうを振り返ると、今までこの道を往来したときにはなかったことだが、遠くの海岸に砕け散る波の音が聞こえてくるのに気がつく。人間には誰にも出会わず、鳥の声も聞こえず、ただ波のざわめきだけが聞こえてくる。それはあたかも暗い子守歌のように響き、Aquis Submersus - Aquis Submersusと歌う。人間が姿を消した世界で波が「水に沈みぬ、水に沈みぬ」と歌う終末論的なイメ - ジをもってヨハンネスの手記は閉じられるのである。

『画家の仕事』

主人公エッダ・ブルンケンは画家という美に仕えるべき職業につき、有り余る情熱を胸に秘めながらも、せむしという肉体上のハンデのために精神的に手ひどい傷を負う羽目に陥ることとなる。すなわち、美しい娘に恋をした彼は、醜い姿に変えられた王子様のおとぎ話に託して愛情告白をするが、厳しくはねつけられ、痛手に耐え兼ねて姿をくらます。一晩中荒野をさまよい歩いた彼は夜明け近くに、ある村の家畜用水飲み場のほとりにたどり着く。そこへ身を投げようとした彼は泥に汚れた靴の片割れを見つけ、その奇妙なものの由来に頭を悩ましている間に夜が明けて死ぬタイミングを逸してしまう。さらにその場には蛙がいて、目撃した事件についてなにやら懸命に話を聞かせてくれるのであるが、これもまたブルンケンの意識を死から遠ざけるのに一役買うことになる。

水飲み場の傍に落ちていた靴はこの村の農家の息子パウルのものであって、彼は前の日にここで身投げをしたのをブルンケンのやって来る数時間前に助け上げられたのである。絵の才能に恵まれながらも農家の跡取りとしては画家になるという希望をあきらめざるを得ず、絶望して身を投げたという。この事件を蛙ではなく、パウルに絵の手ほどきをした小学校の先生から伝え聞いたブルンケンはパウルのスケッチを見て才能を認め、父親を説得し、パウルを弟子および養子として自分の家に引き取る。さらに、自分の姉で寡婦になったマルタとその娘のマリ - アも呼び寄せ、それによって擬似的な家族ができあがる。画家としてのパウルの前途は洋々たるものであるとブルンケンは確信しており、パウルとマリ - アの結ばれる日も遠くないはずである。

この小説も粹物語になっていて、画家ブルンケンの物語は、粹で話題に上った「人は己の人生を手持ちの木で刻まざるを得ない」という教訓の実例として語られる。つまりこの物語は諦念から自足へと向かう物語なのである。ブルンケンの諦念とは彼自身の言葉で言えば「アモ - ルというデ - モンの追跡を素早く逃れ、区切りをつける」ことに他ならなかった。このことをアレゴリカルに示す手法として彼の手になる2枚の絵が使われる。1枚は手酷い打撃を受ける以前に描かれたもので、ヴィ - ナスの立像を見上げている自分を前景に配した構図をとっている。他の1枚は以後のもので、ヴィ - ナス像の足下にはパウルとマリ - アに似せた男女のカップルが憩い、画家自身は後景に目立たないように描かれている。女性の愛を断念して前景から後景へ退くという精神的転回を遂げたブルンケンは才能ある後継者を得て指導にあたる。その後継者は愛にも恵まれ、ブルンケンの姪と結ばれる。このようにして芸術と家庭とが完成するというわけである。

この小説は諦念から自足へ至る物語であると同時に、家庭成立の物語、より正確に言えば父と息子関係成立の物語なのである。そして、父とな

り子となる2人の人物はともに水からの生還という体験を経ている。なるほど、たしかにこの物語の中で身投げするのはパウルだけであってブルンケンはそうではない。しかし、ブルンケンも水飲み場へは「藪や茨をとおり抜けて来ただけでなく、沼地や濠もおってたどり着いた」のであり、水飲み場で初めて彼は水と出会うのではない。象徴的な意味において、この時までにはすでに水の中にいたと考えなければならず、その意味で彼も水からの生還者なのである。

『桶屋のバッシュ』

桶職人のダニエル・バッシュは同居していた姉ザロメが養老院に入ったのを機に、かねてからの計画を実行し、同じ町に住むリーネを妻に迎える。夫50才、妻37才という晩婚であったが、息子のフリッツは活発な子で、母親の歌声にも満たされた幸せな家庭が築かれる。しかし、フリッツが6才のとき、妹が授かるはずであったお産で母子ともが死亡する。

フリッツは学校を出ると父の仕事場で徒弟修行につき、やがてハンブルクに出て、大きな桶屋の職人となる。さらにアメリカの食肉業者に雇われてカリフォルニアへ渡る。その後彼からは一度便りがあっただけで以後は音信不通となって数年が経過し、ザロメも亡くなり、ダニエルの周辺では寂しさが募るばかりである。そこへフリッツが死んだらしいという知らせによって決定的な一撃がもたらされる。ダニエルは桶作りにも身が入らず、夕方になると妻と姉の眠る墓地に出かけ、彼方の海を眺めつつ物思いに耽る。死の想念が彼を捕えてしまったのである。昔フリッツが友達からもらい、親子でかわいがっていた鸛をダニエルは今では息子の形見と思って大事にしていたが、それが行方不明になってしまうと彼の生きる意志も潰え去り、町外れの池に身を投げる。

ところが彼は助けられるのである。そして、これ以後ダニエルの運命は好転する。救助されたあと意識の戻らないまま数日が経過するが、そのあいだ

に、死んだはずのフリッツがアメリカから戻り、盗まれた鷺も返ってくる。
この小鳥の鳴き声で意識を取り戻したダニエルは息子を抱きしめることのできる幸福にも恵まれ、このあと物語は、幸せな親子の幸せな後日談を手短に報告し、フリッツの婚礼の日にダニエルが大往生を遂げたところで終わる。

この物語の転回点がダニエルの身投げであることは明白である。この出来事を境として前半が喪失、後半が再獲得というふうに対置されている。前半における喪失状態の彼は家族を失っただけではない。経済的基盤も失っている。町では自前の桶職人をかかえた新しいビール醸造場ができ、ダニエルの得意先であった古い醸造場は窮地に追いやられ、その経営者の死が重なってダニエルの商売も苦しくなる。そこへ家族の喪失が重なって彼は生きる意欲までなくし、生ける屍状態に陥る。

そのことをアレゴリカルに示すのが家の玄関の上に砂岩で彫られた難破する船乗りの像である。リ・ネとこの家に新居を構えたときダニエルが最初にしたことは、この像をモルタルで塗り込め、その上に新妻を表わすバラの花と子供を表わす薔を画家に描いてもらうことであった。ところが、今や妻も子供もなくした彼はこのモルタルを剥がし、船乗りを波間に引き摺り込もうとしている死神の像を再びあらわにするのである。それによってダニエルはアレゴリカルな死を選び取ったと言うことができよう。そのうえで彼は身投げをするのである。

ところが、もともとこの身投げには最初から滑稽なところが付随している。ダニエルは身投げすることを公言したうえで池へ向かい、たくさん若者が彼を取り巻いていっしょについて行き、その様子は祭りの行列さながらである。そのなかには2人の水泳名人がいて、ダニエルより先に水の中に入って彼の飛び込むのを待ち受け、すぐさま救助することになる。彼らの泳ぐ様子はトリトンのようであると形容される。祭りの行列を組んで出かけ、海の神の息子たちが救助の準備をして待っている

奇妙な身投げ、身投げと呼ぶにはあまりにも悲劇性の欠如している身投げの正体はいったい何であるのか。

これがダニエル再生のための儀式なのであると理解すれば、この奇妙さも納得がいこうというものである。ダニエルは自分の身投げを記憶していない。それも当然である。なぜなら、彼は一度死に、新しい人間となって蘇るからである。言い換えれば、この身投げと救出から成る儀式を一種の洗礼と見なすことができよう。ただし、キリスト教的な洗礼ではなく、ポセイドンの息子たちによってほどこされる洗礼であり、そんなものがあるとすれば異教的な洗礼である¹⁴⁾。

この洗礼を経てダニエルは、親方になった息子、活気溢れる仕事場、息子の嫁になるべきやさしい娘を獲得し、父親としても親方としても復活するのである。

(3) まとめ

以下、煩雑さを避けるために作品に番号を付し、さらに、水死者の出る から までをAグル - プ、水からの生還者の出る をBグル - プとまとめることとする。

Aグル - プ

- 『ヨ - ン・リ - ヴ』
- 『キルヒ父子』
- 『管財人カルステン』
- 『水に沈みぬ』

Bグル - プ

- 『画家の仕事』
- 『桶屋のバッシュ』

以上 6 作品は水死のモチ - フあるいは水から生還のモチ - フが物語の展開や結末に大きく関わっているという共通点に注目して取り上げた作品である。しかし、各作品の分析を通じて明らかになったように、これらはみな父親の物語であるという点でも共通している。このことは偶然であるとは思えない。なるほど、シュトルムの作品のなかで他にも水死のモチ - フが重要な働きをしているものとしては冒頭でも挙げた『大学時代』『莊園にて』『白馬の騎手』があるし、水から生還のモチ - フが物語の出発点を成している作品として『プシュケ』を無視することはできない。これらのうち『白馬の騎手』は微妙な位置にあるのでひとまず置くとしても、あとの 3 編が父親の物語でないことははっきりしている。しかしそれでも 3 対 6 である。水死者の出る、あるいは水から生還する物語の多数が父親の物語でもあるということは言を待たない。

では、これら水死物語 = 父親物語の内訳はどうなっているのだろうか。水死物語として見た場合、A グル - プの顕著な特徴は水死者が息子であるという点である（ ）。父親は直接の水死者となることはなく、目撃者ないし立会人の立場にとどまる。しかし、彼らも手酷い打撃を受け、 　　では卒中の発作に襲われる。のみならず、カルステン・カルステンス（ ）は物語の最初にユリア - ネことロ - レライに魅せられて難船すべく運命づけられている。また、ヨハンネス（ ）はかつて母親に呪われた少女が溺死した池を埋め立てた場所で引き摺り込まれそうな感覚にとらわれるし、息子が溺死したあと自分を含む全員（「我々みんな」）が洪水に吞まれたという意識をいただく。直接水に沈むわけではないが、彼らもまた水に沈んだ人間と呼んで差し支えないであろう。

B グル - プの父親たちは自らが直接水に飛び込もうとしたり（ ）、実際池に飛び込んだりして（ ） この点で A グル - プとは際立った対照をなしている。そのうえ、水から生還するという点でも際立った対照をなしている。

父親物語として見た場合、両グル・ブの違いはさらにいっそう際立ってくる。不幸な父親と幸福な父親。ハンス・キルヒ（ ）は出世の期待を裏切った息子を拒否し続け、ついに息子を失う。管財人カルステンは自分の家族の財産管理に失敗し、息子の破産を招くことによって父親としても失格する。ヨハannesは池に沈む息子を救い上げられず、洗礼者としても父親としても失格する。彼らの息子たちは水に沈み、蘇りの与えられることはない。父親たち当人にも新たな生は与えられず、ハンスはヴィ・ブに支えられて、カルステンはアンナに支えられて追憶のうちに余生を生き延びる。ヨハannesは死んだ息子を画布の上に描き留め、事の次第を手記として残しはするが、それ以後の彼の消息は不明である。

ヨハannesの事例は、父親自身が蘇りの可能性を奪われていることが徹底的に表象されている典型例として記憶すべきかもしれない。そのことは次に引用する小説の結末部分によって明示されている。ヨハannesの手記が終わり、小説全体は次のように締め括られる。

ヨハannes氏がかつて己の力量を十全に感得しつつ、いつの日かまた自己の芸術において偉大なる者たちに匹敵せんものと不敵にも思い描いていたことは虚空へと発せられた言葉にとどまることとなった。彼の名は名だたる名前には属さず、芸術家辞典において見いだされることもほばないであろう。彼の狭い故郷にあってさえそういった名前の画家を知る人はいない。あの大きなラザロの絵については我々の町の年代記が触れてはいるが、絵そのものは今世紀の初めに古い教会が取り壊された後、他の芸術品同様処分され、なくなってしまった。

水に沈みぬ¹⁵⁾。

ヨハannesが画家として名を成さなかったことも、彼の描いた死者ラザロ蘇生の大作が現存しないことも当然なのである。なぜならば、子供

が池に沈んだあの時、彼もまた水に沈んでしまい、蘇らなかったからなのである。彼は画家としても存在することはなかった。

同じように画家であるエッダ・ブルンケン（ ）は自分の子供こそいないが、それを代替する家族を得ることができた。女性の愛を断念することによって家族を作るという逆説を彼は体現している。女性の愛を得たヨハンネスが父親となれず、孤独のうちに投げ出されるのたまさに対照的である。そのようなブルンケンの諦念を経ての再生を告げる出来事として水からの生還が設定されている。水から生還した2人の男の一方が父となり他方が子となるのである。

ダニエル・バッシュ（ ）は最初から最後まで父親であって、あらためて父親になる必要などない。彼の場合は全てを失った不幸な父親から全てを再び獲得した幸福な父親への変身の物語である。両者を前後に隔てる境界としてダニエルの身投げと救出が置かれている。これを境に不幸な父親は消え去り、幸福な父親が蘇る。

Aグル・プのなかで は他の3作品とは異質である。まず実の父親であるリック・ガイア・スが溺死する。次に娘のアンナが入水自殺する。しかし、むしろ端役であるリックの死はさほど重要視する必要はないであろう。実際上の父親として重きをなすのはヨ・ン・リ・ヴのほうであるから。それに対して、死ぬのが息子でなく娘であることはヨ・ンに救いをもたらす要素となっており、この点が を他の3作品とは異質にしている本質的な点であると考えられる。

アンナに死なれてヨ・ンは結局彼女の父親になりそこねたわけではあるけれど、彼女が遺した赤ん坊を引き取り育てることにより、孫を迂回して彼女の父親の立場をかりうじて確保することができた。さらにそれ以上に重要なことは、この孫リックが船乗りになり、船長にまでなり、ヨ・ンの立派な後継者となってくれたことである。 の父親たちが息子を失うことで己の人生をも失ったのとは異なり、ヨ・ンが娘を失っ

たことは全ての喪失ではなかった。孫が息子の代役を果たしてくれたのである。生まれてくる赤ん坊を自分の子供ということにしたらどうかとアンナに申し出たヨーンの言葉が実現したと見ることもできよう。

このように変則的ではあれ父と息子の関係が成立し、ヨ - ンの晩年が追憶に耽るだけの空虚な人生でなかったことを考えれば をAグル - プに入れるのは無理であろう。彼は水に沈んだ父親などではないのである。かといってBグル - プに入れるのも適当ではなかろう。なんといってもアンナを失ったことはヨ - ンにとって大きな打撃であることは間違いないのであり、喪失そのものが埋め合わせられることはないのだから。彼は水をくぐって生還することで新たな生を得た父親でもないのである。はAグル - プとBグル - プの中間に独自の位置を占める作品と言ってよいであろう。

このように整理したうえでAグル - プ とBグル - プ を見てみると、すべてが父親と息子の物語であることにあらためて気づかされる。父親の物語というのは基本的に息子をもった父親の物語であると言ってもよいであろう。そしてそれらは、息子が水に沈んだ者は自らも水に沈んで父親であることをまっとうできず（Aグル - プ）、水から生還する者は息子が与えられ父親となることが許される（Bグル - プ）という対応関係をもつ物語である。すなわち、父としての存在を獲得するためには水をくぐり抜けること、言い換えれば洗礼を受けることが不可欠である。

「洗礼の象徴的意味と水の象徴的意味は昔から同一である。洗礼の水は清めてくれ、新たな生の始まりとなる。沈むことは死を、浮き上がることは新生を意味する」¹⁶⁾ のであれば、洗礼についての明確な言及のない以外の作品においても洗礼のイメージを読み取ることが許されるであろう。いや、むしろ必要であろう。そのように見れば、死と生に關して対立するかに思えたAグループとBグループの表面的な違いは解消されねばならない。父親と息子をめぐる洗礼の物語という、より大きな視角のも

とでこれらの小説を統合することのほうが重要であると言えよう。

元々人間の原罪を洗い清める象徴的な儀式である洗礼をなぜ父親が受けなければならないかといえ、それは父親としての存在が原罪を背負い込んでいるからである。これこそシュトルムが水死にこだわり、父親と息子の物語を水死物語＝洗礼物語として創作した理由である。水によって洗い清められるか、息子ともども原罪を背負ったまま水に沈むか、二つに一つの選択を迫られた存在が父親である。「この瞬間からダニエル親方の運命は向きを変え、再び上昇する」()のか「父親の罪が我々みんなを黒い洪水の中にひきさらってしまう」()のかどちらかである。

水死物語＝父親物語を分析することによって私たちはシュトルムが原罪としての父親の存在を形象化しているという理解を得ることができた。と同時に、この理解は新たな疑問の始まりでもある。シュトルムにとって父親であることがなぜ原罪であるのか。この疑問に対しては、医師の資格試験に失敗し続け、やっと通ったものの飲酒と浪費に蝕まれ、38才で人生を終えた長男ハンスの不幸な父親であったシュトルムの伝記的事実をもちだして説明することも可能であろうし、あるいは、19世紀のヨーロッパにおける家族をめぐるイデオロギーのあり方と関連づけることも可能であろう。ひょっとしたらフロイトのエディプス論の出番があるかもしれない。しかし、このように直接的かつ根元的な疑問にこたえるにはシュトルムの他の作品、とりわけ母親と息子の物語を今回の分析と関わらせて論じることが必要であろう。なにしろシュトルムは母親と息子の物語も書いているのであり、母親は水死したりなどしないのであるから。とりあえず本稿では、父親と息子の物語における水死のモチ・フが、原罪としての父親の存在を形象化するために使われていることを確認しておきたい。

注

1) 例えばWeber, Albrecht: Deutsche Novelle des Realismus. Gattung-

Geschichte-Interpretation-Didaktik. München 1975, S.101.

- 2) 例えばKunz, Josef: Die deutsche Novelle im 19. Jahrhundert. Berlin 1970, S.142f. (= Grundlagen der Germanistik. 10.)

Cunningham, Wm. L.: Zur Wassersymbolik in “Aquis submerses”. In: Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft 27 (1978) S.40 - 49.

- 3) 使用したテキストはStorm, Theodor: Sämtliche Werke in vier Bänden. Hrsg. von Karl Ernst Laage und Dieter Lohmeier. Frankfurt am Main 1987 - 88.

- 4) Freund, Winfried: Theodor Storm: *Hans und Heinz Kirch*. In: Erzählungen und Novellen des 19. Jahrhunderts, Bd.2. Stuttgart 1990, S.311.

- 5) Ebenda S.316.

- 6) Ebenda S.316.

Wiese, Benno von: Die deutsche Novelle, Bd.2. Düsseldorf 1962, S.227.

- 7) ローレライを歌ったなかで最も有名なハイネの詩の3節から6節を参考に挙げておく。日本語訳は筆者で、使用テキストはHeine, Heinrich: Sämtliche Werke. Historikrit. Gesamtausgabe der Werke. Hrsg. von Manfred Windfuhr. Hamburg 1975, Bd.1, S.207,209.

いと美しき乙女が座っている / かなた高くあでやかに / 金色の装身具がきらめき / 乙女は金色の髪をくしけずる

金色の櫛で髪を梳きつつ / あわせて歌をうたっている / 不思議な調べ / あらがいいたい調べ

小舟の中の舟人を / あらぶる悲しみがとらえ / 視線の先は岩礁を逸れ / ひたすら上へと向けられる

私は思う 波が舟と舟人を / とうとう最後に呑みこめば / それは歌声により / ローレライのなせるわざ

- 8) Jackson, David A.: Storms Stellung zum Christentum und zur christlichen Kirche. In:Theodor Storm und das 19. Jahrhundert. Hrsg. von Brian Coghlan und Karl Ernst Laage. Berlin 1989, S.41 - 99, hier S.90.

Fasold, Regina: Theodor Storm. Stuttgart/Weimar 1997, S.145. (=Sammlung Metzler 304.)

- 9) Laage, Karl Ernst: In Storm: Sämtliche Werke (= 注 3) S.926 - 931.
- 10) 個別作品論として『水に沈みぬ』における父親の罪を論じたものとしては次のものが重要である。
- Coupe W. A.: Zur Frage der Schuld in “Aquis submersus”. In: Schriften der Theodor-Storm-Gesellschaft 24 (1975) S.57 - 72.
- Kaiser, Gerhard: Aquis submersus - versunkene Kindheit. In: Euphorion 73 (1979) , S.410 - 434.
- 11) Mackensen, Lutz: Ursprung der Wörter. Etymologisches Wörterbuch der deutschen Sprache. München 1985, S.385 unter ‘Taufe’.
- 12) Cunningham, a.a.O. S.43.
- 13) Ebenda S.43.
- 14) Jackson, a.a.O. S.92.
- 15) Storm: Sämtliche Werke. Bd.2, S.455.
- 16) Freund, Winfried: Theodor Storm. Stuttgart 1987. S.99.